

# 朝を ひらく

永田 円了  
真国寺住職



自分の名前が嫌だった。なんで親は私に「円了」なんて名前をつけたのだろう。「えんりょう、遠慮するな！ お寺の息子！」などと、イジメの対象にもなった。どうして普通の名前をつけてくれなかったのか、親を怨んだ。他の名前が羨ましかった。

世の親たちは、自分の好みと願望で子供に名前をつける。果たして、どれだけ子供本人の気持ちを考えてつけているのだろうか。いっそのこと、人を区別する名前などこの世になければと、傷つきやすい幼心は何度も自問自答した。

## 自分の名前

あるとき、明治の禅僧が某大  
学で哲学の先生方を前に、次の  
ような問題を出した。子供、両親、妻(または夫)の乗ったボ  
ートが池で転覆した。さああな  
たなら誰を先に助けるか。

「親を先に！」と儒教を重ん  
じる人が答える。「いや子供だ  
！」と理論派の人が言う。また  
キリスト教徒の方は、妻(また  
は夫)と答えるかもしれない。  
禅僧曰く、「答えは簡単で  
す。近くにいる人から助けま

す」。人にレッテルを貼らない  
のである。人を区別する一切の  
娑婆の物差しを捨てるといふ考  
えである。

そうか、レッテルを貼らない  
のか。それなら円了という名も  
いらぬ。他と自分を分ける必  
要もない。「私は自由だ！」。  
この禅の考えは素晴らしい、と  
気分がハイになりかける。しか  
し、かといって名前なしでこの  
世に通るわけがない。

そんな中、米國カントリーロ  
ック歌手ジョニー・キャッシュ  
の歌にハッとした。「A Boy  
Named Sue」という歌であ  
る。父親は息子に、スー(Sue)  
という女の子の名前をつけ  
る。

息子は、周囲からバカにされ

恥ずかしい思いをして育つ。だ  
んだんぐれて、3歳の時に家を  
去った父親を恨み憎む。息子は  
成人して、ある時酒場で父親を  
見つけ殺し合いのけんかがはじ  
まる。

父親は言った。「この世は甘  
くはない。お前をタフにするた  
めに、わざとスーという名前を  
つけてやったんだ」。それが飲  
んだくれの父親が唯一息子にし  
てやれたことだった、という歌  
詞である。

何というパラドックス。息子  
にスーという名前を背負わせる  
ことで、強い人間になることを  
願った。自分が憎まれ者になっ  
てまで、あえて息子に高いハー  
ドルを課し、強く生きることを  
教えた。

こういう父親の願いだったの  
か。「ありがとう!」。私にも  
悩み多き素晴らしい名前をつけ  
てくれて。

## 葛藤を経て父に感謝